

## 宮崎市立宮崎北中学校の学力向上への取組

### 1 平成17年度の本校の学力調査結果及び意識調査結果から見た課題

#### (1) 学力調査結果からの課題

すべての教科で、県の平均到達度、達成率を上回っている。しかし国語・社会は、県の平均値との差が小さく、国語では、「漢字の読み、書き」「部首」「文脈に即した内容理解と記述」等が平均値より低く、社会では、「世界の国々」「律令国家における農民の生活」「武家と公家の関係」等が平均値を下回っている。また、理科では、「物体にはたらく力」、数学では、「文字式の表し方」「数量の関係を式で表現」が平均値を下回っている。英語は、すべての分野で平均値を大きく上回っている。



#### (2) 意識調査結果からの課題

- 全体的に県の平均値よりやや高い数値となっているが、自己責任、自己効力感、授業を受ける姿勢（聞く態度・集中力）については、平均値との差が小さい。
- 読書の冊数が県の平均値よりやや少ない。
- TVを見る時間、平日のゲームの時間がやや多い。

### 2 学力向上に向けた課題解決への具体的な取組

#### (1) 学力向上に向けた経営方針

経営方針は、「1つ1つの教育活動をていねいに行い、生徒のもつ力を『引き出し、鍛えて、伸ばす』ことにより、生徒たちに達成感をもたせ、感動ある体験を通して『自信』を付けさせる」である。

この経営理念の根本にあるのは、教師が「プロに徹する」ということ、「学力は活力である」ということ。そして、教師の目指す「目標」まで生徒は達するのであるから、プロの教師たる者は、「常に高い目標を掲げ、粘り強い指導を心がける」という意識改革を図ることを、最重要課題として取り組んでいる。

特に次の3点について共通実践を促している。

- ① プロであるなら、生徒の学力をしっかりと見届け、その結果に「責任をもつ」はずである。学校とは本来、「学力」をしっかりと身に付けるところであり、だからこそ1時間1時間の「授業」の充実が大切であるという観点から、生徒が「分かって・できて」楽しいと感じる、「魅力ある授業づくり」に日々努めるべきである。
- ② プロなら、常に「目標」を高く、一人一人の達成度を見届け、「補充学習」を通して、根気強く生徒の学力を「鍛える」はずである。
- ③ プロなら、学習環境を整えるために、「学習訓練」（姿勢、返事、声の大きさ、忘れ物、等）を徹底させて、学習の基盤づくりに努めるはずである。（『しつけ』のないところに教育は成立しない）

#### (2) 教育課程内の取組

- ① 全教師、年1回以上研究授業を行い、授業研究会等を通して「授業力」の質の向上を図る。
  - 特に主題研で取り組んでいることは「活気ある授業の構築」。
  - その具体策として、
    - 1) 「生徒を巻き込む活動」が工夫された授業であること。
    - 2) 「生徒の表出力を高める」工夫がなされた授業であること。
- ② 「習熟度別少人数指導」の活用を図る。
  - 「数学科」「英語科」は、全学年、全時間、習熟度別のコースに分けた授業を実施し、個に応じた授業を展開している。
  - 学力向上において、この2教科が特に顕著な伸びを示しており、「核」になるこの2教科

が、他の教科によい刺激を与え、全体の底上げに貢献している。

③ 「補充学習」の充実を図る。

- 昼休み、放課後等を活用して、小テスト、定期テスト等で、目標に達していない生徒一人一人の習熟の度合いに応じて、「わかる」まで補充学習を行う。（「英語」「数学」が中心）結局、学力向上は、「生徒一人一人に向き合う」ことによって実現される。

④ 「学習訓練」の共通実践を図る。

- 学習の最も大切な基盤づくりとして、基本的な「学習訓練」の徹底を、全教科共通して取り組んでいる。（チャイム席、姿勢、返事、声の大きさ、聞く態度、忘れ物、等）「学習環境づくり」が、学力向上に大きな影響を及ぼす。

(3) 教育課程外の取組

① 「サマースクール」の充実を図る。

- 夏休み期間中、延べ25日程度、3年生全員を対象に、5教科について「学力補強講座」を実施している。1,2年生については、前半と後半の1週間を、それぞれ「基礎学力徹底週間」「課題徹底週間」とし、該当の生徒を対象に実施している。  
この取組が、9月以降に大きな成果となって表れる。

② 「内部評価」「外部評価」の活用を図る。

- 生徒による「各授業の評価」を活用し、プロとして、真摯に自らの授業力を振り返り、授業の一層の工夫・改善に努めている。

③ 「教科内の連携」の強化を図る。

- 一人一人の教師がバラバラな取組をしていても成果は上がらない。各教科の先生方が共通した実践に取り組むことによってはじめて成果が期待できる。したがって、日頃の教師間のコミュニケーションを密にし、さらに月1回の教科部会等を通して、授業の工夫・改善・充実化を図ることや、各テスト結果の分析・改善・評価、等を行い、学力向上に向けて、教師一人一人の意識改革及び教科間の連携強化に努めている。

(4) 保護者・家庭・地域との連携

① 「外部評価」の活用を図る。

- 参観日の保護者による授業評価アンケートを実施し、授業の一層の充実・改善に努めている。

② 「各通信」を通して啓発を図る。

- 各学担とも、毎日～週1回程度の頻度で通信を各家庭に届けている。通信を通して、特に「宅習」への取組状況について、各家庭との連携に努めている。

3 成果と課題

(1) 「成果」

- ① 「数学科」「英語科」の学力向上が牽引力となり、他教科の学力を引き上げた。
- ② 英語、数学のみならず、補充学習に取り組む教科が増えてきた。（社会、国語）
- ③ 全教師による研究授業、及び授業研究会、各内部・外部評価の活用、教科部会の活性化などの取組を通して、各授業の「質」が向上し、生徒が意欲的に活動し、考えや意見を表出する場面が多く見られるようになり、授業に活気が出てきた。

(2) 「課題」

- ① 「家庭学習」の充実、「読書の奨励」について、各家庭へのさらなる啓発を図る。（まだまだテレビやゲームの時間が多い）
- ② 校内研修の充実に努め、「授業力」の温度差をさらに是正する。